日本大学大学院総合社会情報研究科紀要　No. 2, 191-200 (2001)

An American Tragedy 試論
―アメリカン・ドリームの帰着点―

吉田　友明

A Study of *An American Tragedy*:
A Destination for the American Dream

YOSHIDA Tomoaki

The American Dream is the spirit of democracy that has existed since the foundation of America. It is vitalized by the principle of an equal society of equal opportunities, and has been the energy source for the American nation, causing individuals to have the dream of success, though it was originally a system resulting in material inequalities. In *An American Tragedy* people are depicted who try to live on in spite of the contradictions present in American society, and we are able to view a tragedy which might happen anywhere in American urban society.

１．はじめに

社会は時代とともに変化する。*An American Tragedy*（以下『アメリカの悲劇』と訳す）は，２０世紀初頭におけるアメリカ都市社会の特殊性を描く社会小説である。それは，ピューリタンが新境地で建国の理念を掲げたアメリカという土地で，資本主義社会に生きる一人の青年の半生をめぐる筋に託して描かれている。本研究では，セオドア・ドライサーが『アメリカの悲劇』において描く人間の精神性に焦点を当てて論じてみたいと考える。それはまた，資本主義社会が発達過程にあるアメリカ社会に生きる人間の特殊性をも考察することとなる。

まず，『アメリカの悲劇』を論じるにあたって，その視点となる事項について触れておきたい。

アメリカ社会を理解する上での文化的な特徴として Individualism(個人主義)，Independence(自立の精神)，Equality(平等主義)が考えられる。また，建国の理念とともに民主主義の精神を具現化する象徴的な言葉として「American Dream（アメリカン・ドリーム）」がある。そして，この言葉には大きな二つの捉え方がある。一つは，アメリカ人が建国以来持ち続けてきたアメリカ的な理想社会の夢としての語義である。それは，多くのアメリカ人に共有されている願望として，無階級社会と経済的繁栄の実現および圧制を伴わない自由な政治体制の永続など，今日なお見果てぬ夢として，多くのアメリカ人に生気を与えているものである。もう一つは，先にかかわって，どんな階級に生まれようとも，アメリカの大地で努力すれば，富を得，金持ちになれるとか，成功するというアメリカ人の生活における通俗的な上昇志向の考え方である。『アメリカの悲劇』における主人公クライド・グリフィスは，このアメリカン・ドリームに希望を馳せた人物として考えることができる。

さらに，悲劇概念の検討を試みる。『アメリカの悲劇』というように，小説のタイトルとして掲げられている「悲劇」とは，何を意味するものなのであろうか。『アメリカの悲劇』の構成で考えられる悲劇性は，古来から言われているところの「悲劇」と通ずるものなのであろうか。それをニーチェの悲劇概念に求めてみたい。というのも，ニーチェは１９世紀後半にその思想の舞台を持つが，彼の著作『悲劇の誕生』において，ギリシャ悲劇での「悲劇」の概念を考察し，古典的な意味での「悲劇」概念を捉えているからである。ニーチェは，「悲劇」の概念を導くために，ギリシャ文化の変遷をホメロスに始まり，ドーリス芸術，アッティカ悲劇といった推移でたどっている。その中で考えられているものに，「アポロ的」と「ディオニュソス的」という対立した概念がある。簡潔に言えば，アポロ神は光明と芸術を司る神であり，情念を芸術に形象化するものとしての象徴である。一方，ディ

オニュソス神は酒精の神であり，祝祭での我を忘れた狂乱や陶酔を象徴するものである。前者が混沌に形を与える夢の世界，後者が秩序化され形式化されたものに，もう一度根源的な衝動を与える陶酔の世界としてみることができる。つまり，「アポロ的」とは，夢幻であり，形象化，秩序化するもので，英知的，理想的なものである。それに対して，「ディオニュソス的」とは，陶酔であり，狂騒するものであり，情動的，感性的なものである(1)。そして，ニーチェはギリシャ悲劇における「悲劇」概念の本質を，人間はその欲望する本性によってさまざまな矛盾を生み出してしまう存在だが，それにもかかわらずこの矛盾を引き受けつつなお生きようと欲する，この観念に人間存在の本質を見出そうとしているのである。

そこで本研究においては，『アメリカの悲劇』での人間の欲望，矛盾，そしてなお生きようとする衝動と，アメリカに根ざす「アメリカン・ドリーム」の考え方が，いかに構成されているかを論ずる。さらに，作品のタイトルにあげられている「悲劇」が，古典的な「悲劇」概念として捉えられ得るものであるのか，検討を加える(2)。

2．欲　望

（1）アメリカン・ドリームの実現

アメリカン・ドリームとは，幻想なのであろうか。1776 年の独立宣言を発して以来，アメリカン・ドリームは，アメリカ国民に生気を与え続けてきた民主主義の精神を具現化する自由と平等の理念として捉えられる。

１８世紀から新境地を求めての開拓が行われた。古くからの安定した土地よりも，新しい混沌とした場所へと夢と希望を求めていったアメリカ人。そして，彼らは機会と可能性を求め，他と競争をしつつも努力によって成功することを精神的な基盤としていったのである。それは，鉱山の開発や事業での成功といったような富と名声と社会的な地位を得るかたちで実現していったものである。アメリカン・ドリームは，個人にとっては社会的な評価を上昇させるといった「成功の夢」であり，アメリカ社会にそれを容認していく機会があり，自由と平等を保障する社会制度があるものと信じられてこそ生まれてきたのである。自由競争と機会の均等が，「成功の夢」の前提条件として信じられていたのである。

ニーチェは『悲劇の誕生』において，アポロ的・ディオニュソス的なギリシャ文化の推移を論ずる中で，人間の生や存在の本質について次のように述べている。「生は醒めている半分と夢見ている半分とから成っているが，醒めている時のほうがわれわれには比較にならないくらいすぐれて，重要な，値打ちのある，生きがいのある半分と思われている。いな，生きるとは，この醒めた半分だけを生きることだとさえ思われているくらいなのだ。このことがわれわれにはどんなに確かなことだと思われているにしても，それでも私はたいへん逆説めくが，夢の価値をちょうどその正反対に評価することを主張したいと思う。われわれの本体のあの神秘的な根底―その現象がわれわれである―にとっては，夢が逆に評価されるといいたいのだ」(3)と。加えて，形而上学的な仮説として「真に実在する根源的一者は，永遠に悩める者，矛盾にみちた者として，自分をたえず救済するために，同時に恍惚たる幻影，快感にみちた仮象を必要とする仮説である。仮象のうちに完全にとらえられており，また仮象から成り立っているわれわれ人間は，この根源的一者のつくり出した仮象を，真には存在しないもの，すなわち，時間・空間・因果律のうちにおける持続的な生成として，ことばをかえて言えば，経験的な現実として感ぜざるをえない仕組みになっている」(4)というのである。まずここでは，『アメリカの悲劇』の主人公クライド・グリフィス（Clyde Griffiths）の欲望をアメリカン・ドリームの実現の視点から考えてみたい。

（2）少年クライドの野心

クライド・グリフィスは，「成功の夢」を志した一人のアメリカ青年である。彼は，貧しくも伝道を生活としている両親のもとで育った。そして，当然のことながらその伝道活動を強いられるなかで，いつしか成功への道を歩もうと夢みたのであった。クライドが少年の頃，心の中ではこうつぶやいていた。

> He did not wish to do this any more, that he and his parents looked foolish and less than normal. …… What good did it do them to have him along? His life should not be like this. (p.12)

How was one to get a start under such circumstances? (p.17)

そして，この境遇から脱するためには，独力で何かするしかなかったのである。このような家庭環境は，クライドに虚栄心や自尊心を強めさせ，ティーンエイジとなって成長するにつれて異性への関心も持つようになっていったのである。

Clyde was as vain and proud as he was poor. …… by the time the sex lure or appeal had begun to manifest itself and he was already intensely interested and troubled by the beauty of the opposite sex, its attractions for him and his attraction for it. (p.18)

さらに彼が，自分の置かれた境遇と社会で成功した人を見るにつれて，自身の「成功の夢」への願望を考えるのであった。

And yet the world was so full of many things to do—so many people were so happy and so successful. What was he to do? Which way to turn? What one thing to take up and master—something that would get him somewhere. He could not say. He did not know exactly. And these peculiar parents were in no way sufficiently equipped to advise him. (p.19)

これが，少年期に培われたクライドの内なる生命力である。

（3）ロバータとソンドラの二人の女性との出会い

クライドは，伯父の経営するカラー工場を訪ねた末に職を得て，自己の可能性と真の成功を求めて働き始めるのであった。やがて彼が，管理的な立場を任されると，工場の臨時工員の一人ロバータ・オルデン(Roberta Alden)に今までに会った誰よりも心をそそられるような気持ちをもつのであった。クライドのロバータへの心境は次のように記されている。

Her pretty mouths, her lovely big eyes, her radiant and yet so often shy and evasive smile. And, oh, she had such pretty arms—such a trim, sentient, quick figure and movements. If only dared be friendly with her—venture to talk with and then see her somewhere afterwards—if she only would and if only dared. (pp.254-255)

そして, クライドとロバータの関係は絶頂を迎える。お互いが愛の言葉を交わし合うようになり，恋に落ちていく。

“ Oh, Roberta, dearest, please, please, say that you love me. Please do! I know that you do, Roberta. I can tell. Please, tell me now. I’m crazy about you. We have so little time. ”
“ Yes, yes, yes. I do love you. Yes, yes, I do. I do. ”
“ It’s all right, Roberta. It’s all right. Please don’t cry. Oh, I think you’re so sweet. I do. I do, Roberta. ” (pp.276-277)

もう一人，上流階級に属するソンドラ・フィンチリー(Sondra Finchley)との出会いがある。
彼女に最初会った時にはまるで関心を示さなかったのだが，ライカガースで社交的な地位を手に入れる可能性が見いだされるとなると，彼女こそ憧れの世界への橋渡しの意味を持っている女性と思えたのである。ソンドラとの交際に熱望するクライド。彼の心中は，次のように語られる。

Ah, to know this perfect girl more intimately! To be looked upon by her with favor,—made, by reason of that favor, a part of that fine world to which she belonged. Was he not a Griffith—as good looking as Gilbert Griffiths any day? …… But now, as he gloomily thought, he could only hope, hope, hope. (pp.308-309)

ロバータの妊娠をきっかけに，クライドは二人の女性をめぐって困惑する。ソンドラは何でも提供してくれて，何も要求しない。一方，ロバータは何も持っていないで，すべてを要求する。そしてクライドの欲望は，魔神がささやくことで描かれる。彼の心に起こる解決の方法は何か。今，クライドに生ずる衝動は「成功の夢」を実現させる手段として，彼自身の欲望を破壊させてしまう人間を無くすることにある。一つの悪をやってのけることによって，欲望と夢のすべてが実現される。魔神はこう語るのである。

Pah—how cowardly—how lacking in courage to win the thing that above all things you desire—beauty—wealth—position—the solution of your every material and spiritual desire. And with poverty, commonplace, hard and poor work as the alternative to

all this. (p.466)

ソンドラの愛を得ることは，クライドの成功の夢を実現させることに通ずる。この魔神のささやきは，クライドの暗い半面に影を潜め，彼の生きる衝動として姿を現すのである。

３．　矛　盾

（1）クライドの「ディオニュソス的」葛藤

ボートの転覆事件は, クライドの心を揺るがせた。彼の頭の中をある考えがよぎるのだった。

—he and Roberta were in a small boat somewhere and it should capsize at the very time, say, of this dreadful complication which was so harassing him? What a relief from a gigantic and by now really destroying problem! (p.440)

はじめにこの考えが浮かんでから，クライドは困難な局面の解決とそれを止まらせる自己抑制とが交錯するようになる。一度，打ち消したはずの考えも，再び息を吹き返したかのようにクライドの脳裏に浮かんでくるのである。このクライドの混乱した—陶酔ともいうべき—状態は，ニーチェの悲劇概念でいうところの「ディオニュソス的」な，情動的，感性的な狂騒状態を呈するのである。ここでは，クライドの心の動きを時間的な経過と共に追ってみる。

—for could a man even think of such a solution in connection with so difficult a problem as his without committing a crime in his heart, really—a horrible, terrible crime? He must not even think of such a thing. It was wrong—wrong—terrible wrong. (p.440)

クライドの先の考えもすぐに打ち消し，心の中で犯罪を犯していることを覚える。しかし，仮にこういうことが起きたならば，ということを想定して，全ての問題が解決できるのではないかと考えるのである。

And yet, supposing,—by accident, of course—such a thing as this did occur? That would be the end, then, wouldn't it, of all his troubles in connection with Roberta? No more terror as to her—no more fear and heartache even as to Sondra. A noiseless, pathless quarrelless solution of all his present difficulties, and only joy before him forever. Just an accidental, unpremeditated drowning—and then the glorious future which would be his! (p.440)

そういうものの，自分が犯罪を計画しているわけではないことを執拗に思い返す。そして，新聞で報じられる湖での行方不明事件とロバータとを結びつけようとするクライド自身を意識的に否定するのである。

……The more thought of an accident such as that in connection with her, however must he might wish to be rid of her—was sinful, dark and terrible! He must not let his mind run on any such things for even a moment. It was too wrong—too vile—too terrible! Oh, dreadful thought! (p.441)

結局は，“ Decent, sane people did not think of such things. And so he would not either—from his hour on. ” (p.441)という気持ちをもつようになり，控えめで真面目な人間はそんなことを考えないものだとして，心の整理をつけるのであった。

クライドは無意識のうちにも，ためらいもなしに暗示的で挑発的な記事を最後まで読み通す。そして，ソンドラを失ってしまいそうな予感がすると，何かがクライドの中に入り込もうとするのを感じるのである。クライドの呟きが次のように語られる。

What was “getting into” him? Murder! That's what it was. This terrible item—this devil's accident or machination that was constantly putting it before him! A most horrible crime, and one for which they electrocuted people if they were caught. Besides, he could not murder anybody—not Roberta, anyhow. Oh, no! Surely not after all that had been between them. And yet—this other world! —Sondra—which he was certain to lose now unless he acted in some way— (p.461)

クライドの苦悩はさらに続く。彼自身ももうこれ以上考えないようにしていても，脳裏に浮かんできてしまうのである。無意識のうちに考えてしまうロバータの殺害計画だが，彼の心は必死に打ち消そうとしている。そのままにしておいたならば，計画を立ててしまいそうなクライドなのだが，決してそのよ

うなことができるような人間ではないことを，自分自身に言いきかせているのである。クライドの苦悩は，「ディオニュソス的」なそれであり，殺害計画を考えている自分とそれを抑制させる自分との間を往復しているのである。ソンドラを獲得することが「成功の夢」を実現させることであるがゆえに，苦悩し，葛藤し，陶酔しているアメリカ青年が描き出されているのである。

（２）クライドの内的な矛盾

自由と平等の民主主義を掲げた国民的な理想としてのアメリカン・ドリームは，個々のアメリカ人によって，個人的な願望として「成功の夢」を抱かせた。１８世紀後半から１９世紀にかけてアメリカ各地での開拓が進み，富の獲得の成功を収めた人々は，その理想を確信するに至っている。アメリカン・ドリームとは，自由で平等な社会で生きるというアメリカ人の理想が込められているものである。

ところが，本来アメリカン・ドリームと「成功の夢」とは表裏一体をなすものであるが，アメリカ人の個人間での競争と物質万能主義の考えとが結びついたとき，資本主義体制の社会では，物質を追求することに翻弄するレベルでの生き方に陥ってしまうのである。クライドは，恋愛という肉体的かつ精神的な欲望を満たし，自分の上流社会への仲間入りを達成させようとする社会的地位の上昇の欲望を持つごくありふれたアメリカ一青年である。それが，ロバータとの恋愛関係が深まり，新たにソンドラとの関係ができると，ロバータを悲しませないようにとった行動が，彼女の妊娠という時間的な制約も加わり，クライドに殺害の計画を立たせるまでに追い込んでいったということである。クライドには，富と社会的地位と性の欲望があり，「成功の夢」という理想に向かって邁進していくわけだが，アメリカの物質文明の発展とともに，建国の理念としてのアメリカン・ドリームと現実社会での個人内での「成功の夢」との間には，両者が乖離していくという矛盾がおきるのである。それは，クライドに「ディオニュソス的」な苦悩を生じさせ，結局はその場の状況に流されてしまう弱き人間の一人として描き出されているのである。因習的な道徳意識よりも，物質主義による欲望が満たされることが優先され，またその判断する理性を失わせしめる社会環境をクライドはもつのであった。

ロバータが目の前で溺れている際に，それをしばらくの間待たせ，助けの手を差し伸べさせない魔神のささやきがあった。そのことは，殺害計画を否定し続けたクライドの道徳観念―両親が伝道者であるという因習的な倫理観念を大事にするピューリタンの環境で育てられてきたものであるわけだが―を打ち破るに至った。その瞬間にこそ「ディオニュソス的」な苦しみをし続けてきた彼自身に，内的な矛盾が表れるのである。ロバータを溺れさせ，逃亡するクライドは，アメリカ物質文明社会でのアメリカン・ドリームと「成功の夢」の乖離を象徴する矛盾として示されるものである。

４．生の衝動

クライドは捕らえられ，裁判にかけられる。そして，メイソン(Mason)検事の思惑通りに，電気椅子に送られる恐怖に脅えながら過ごす日々を迎える。これまで「成功の夢」に向かって一歩一歩進み続けたが，そこから一気に転落してしまうのである。しかし，恐怖の苦しみを感じつつも，生への衝動は最後まで捨てていない。そこにこそ，クライドの悲劇的な舞台があるのである。

（１）母エルヴィラの愛情と信念

クライドから有罪判決の手紙をもらい，新聞でも有罪が報じられ，絶望のどん底に突き落とされた後になっても，母エルヴィラは息子の無実を信じていた。そして，次のような声明をする。

> “I cannot think this morning. I seem numb and things look strange to me. My boy found guilty of murder! But I am his mother and I am not convicted of his guilt by any means! He has written me that he is not guilty and I believe him.” (p.742)
> She could not doubt him―even now. (p.742)
> “…… I believe my son. I am convinced that he is innocent.” (p.743)

エルヴィラは，真実を打ち明けられるのは私しかいないことを覚り，どんな絶望的な境地に追い込まれようとも，信念をもった平静さを失わないのであった。そして，“…… I must think as a mother how to help

him, however I feel as to his sin. ”(p.744)と述べ，母親として力になってやる方法を考えねばならないと次の行動に出るのである。

やがて，「息子のための母の訴え」を演題とする講演旅行に出るエルヴィラは，資金もたまってきた。シラキュースで講演をしているときに，ダンカン・マクミラン牧師（The Reverend Duncan McMillan）と出会い，彼は母親の大きな悲しみと何とか助力を求めようとしている苦しみに感動を受けたのである。さらに, 独房で死刑を宣告されたクライドに対して, 何か事情があってそうなったのではないかと考えてくれるのであった。エルヴィラは，このマクミラン牧師にクライドに会ってもらえるように説得するのであった。

エルヴィラには，クライドの安楽や贅沢や美や愛を求める渇望を理解できるはずはなかった。とりわけクライドが望んでいた華美，快楽，資産，社会的地位を伴う恋愛への熱心で変わることのない憧憬や欲望が理解できるはずはなかった。クライドの死刑執行の二日前，エルヴィラは知事に電報を打つ。勿論クライドの有罪への確信があるのかという内容である。母の電報は，以下のようである。

> “ Can you say before your God that you have no doubt of Clyde’s guilty?　Please write. If you cannot，then his blood will be upon your head. His mother. ” (p.809)

しかし，母エルヴィラの信念もここまでである。“ Governor Waltham does not think himself justified in interfering with the decision of the Court of Appeals. ”(p.809)と，淡々とした無情な電報が返ってきただけであった。

（2）クライドの深まる孤独感

母エルヴィラの献身的な訴えに感動し，判決が間違っていて，クライドは無実なのではないかと考えてくれたのは，マクミラン牧師であった。彼はクライドの母から，ロバータに全く罪が無いとはいえないこと，どうしてロバータを全くの無罪とみなすのか，法的に大きな間違えがあって，不当に刑が執行されようとしていることを訴えられたのである。この考え方が重要で, ほとんど真実のように思われて，マクミラン牧師の心を動かしたのである。マクミラン牧師はクライドと会った時，最初にこの言葉を与える。

> “ …… But it is to bring you spiritual joy and gladness that I am here. ”(p.780)

クライドは，この牧師の活力と自信と親切さにあふれた態度にひきつけられるのであった。しかしクライドにとっては，両親が行っていたあの成果のあがらぬお祈りや訓戒が忘れられず，宗教やその成果への子どもの頃からの軽蔑が抜けきれずにいた。結局，クライドの孤独感はいっそう強まっていく。クライド自身にはどうしても克服することができない強い衝動や欲望があることが真実であるからである。クライドは，こう考えるのであった。

> He had thought of those, too，and then of the fact that many other people like his mother，his uncle, his cousin, and this minister here, did not seem to be troubled by them. And yet also he was given to imagining at times that perhaps it was because of superior mental and moral courage in the face of passions and desires, equivalent to his own，which led these others to do so much better. (p.785)

自分の周りにいる母や伯父や従兄弟たちが，クライドが抱いたような欲望に心を動かされていないことに気付き，クライドよりもずっと高い精神的な倫理的な勇気をもっているがゆえに良い生活を送っているものと考えたのである。そして，クライドは悔い改め，問題の全てについて自分ではっきりさせるためにもマクミラン牧師に告白する決心をするのである。

クライドは牧師に，ロバータとのボートの中での決定的な冒険で，裁判では心境の変化があったと言ったが，それは嘘で，心境の変化がなかったことを告白する。最初にロバータへの憐れみがあって，殴ろうと計画していたことを恥じる気持ちがあり，その一方には怒りもあったということ，そして，そういう邪悪な行為の結果についての不安もあって，そのために腹立たしくなっていたということである。加えて，ロバータが立ち上がって近づいて来ようと

した時に，偶然殴ったことにロバータへの怒りが幾分込められていたことが，その時のクライドの真実であったという。さらに，ボートが転覆して二人とも水に落ちたときには，ロバータが溺れかけていても「何もするな」という気持ちがあり，そうすることでこの女性から逃れられると思っていたことを述べるのであった。そして，クライドの告白を聞いたマクミラン牧師は，いくつかの質問をし，一つの結論を語るのである。

> “……If she drowned you could go to that Miss X. You thought of that? ”
> The Reverend McMillan’s lips were tightly and sadly compressed.
> “Yes. ”
> “My son!　My son!　In your heart was murder then. ”
> “Yes, yes, ” Clyde said reflectively. “I have thought since it must have been that way. ” (p.795)

ソンドラの美貌と地位にひかれて計画をしたという事実，それはクライドが利己主義，不浄な欲望，姦淫の混合した存在であり，神の前で様々な罪を犯したことになるというのがマクミラン牧師の結論であった。クライドの告白は，決して彼自身を救うことにはならなかった。精神的にクライドを罪から開放しようとしても，現実には有罪であったからである。クライドの孤独感は，ますます深まった。誰も信じてくれるものはいなかった。そしてクライド自身，自分が無実だと思うこともあれば，有罪に違いないと思うこともあって，心中は揺れていた。

クライドはまだ「生きた」とは思っていない。間違った飢えを覚えたクライドを信じてくれるものは無く，彼と同じような苦しみを感じているものが少なくないことを訴える。日々の美しさを求め，仕事や愛や活力や欲望のある日々，それが生命“life”である。彼は同情よりも真の理解がほしいのである。自分の罪が最後まで「本当にそうなのか？」と納得できないクライドには，死刑執行を目前にして，こう呟くのである。それはクライドの生の衝動が最も表されている。

> “Mama, you must believe that I die resigned and content. It won’t be hard. God has heard my prayers. He has given me strength and peace. ” But to himself adding: “Had he? ” (p.809)

（3）メイソン，クライド，母親の三つの立場

ここで，メイソン，クライド，母親の三つの立場を捉え直して，悲劇の構図を考えてみたい。メイソン検事は政治的な野心を持ち，今回のクライドの事件をきっかけに民衆の信頼を得て，自分のポストを安定させようとしてエネルギーを注ぐのであった。また，検事という社会的な正義を代表する立場にあった人物である。一方クライドは，アメリカン・ドリームの名のもとにライカガースでの「成功の夢」に邁進し，富，女性，地位を得るためにジレンマに陥り，最終的には躊躇したものの殺人計画をも企てた人物である。そしてクライドの母エルヴィラは，自分が育てた息子であるという愛情と，クライドの「私は無実だ」という言葉をひたすら信じ，息子の生命を守り通そうと信念を全うした人物である。

クライドは，個の欲望を物質に転化し，人間を商品化してしまうことで自己の成功を考えていった。彼がロバータと出会ったときは，性への快楽欲望に翻弄されるが，富と社会的な地位，さらに女性の美しさが得られるソンドラとの出会いがあると，その欲望のほうにとらわれ，二人の女性が商品化してしまったのである。より商品価値の高い方に目が奪われる物質文明の社会機構の中に，クライドは存在していたのである。そして，ボートの転覆という偶然性の高い事故で，ロバータは溺死してしまう。その出来事の真相は，クライドの心の問題であり，状況に対応する人間としての判断の問題でもあったのである。因習的な倫理観念が尊重されるピューリタンとしての環境で育ったクライドであるが，個の商品化された欲望と人間の道徳観念の間で葛藤するのである。個が「成功の夢」という理想に向かって，富，地位，性などを実体あるものに形象化していく作用は「アポロ的」である。しかし，形作られたものにさらにエネルギーを加えて，形あるものを破壊し，より次元の高いものへ突き動かす作用は「ディオニュソス的」である。クライドはロバータを商品化し，物質的な存在に転化させてしまった。クライドにあった人間としての道徳観念や倫理性を破壊してしま

った作用こそ，資本主義社会の物質文明の導く社会機構として働く力なのである。

メイソンは，社会の正義を代表する立場で，彼自身の個のよりよき地位を得ようとした。メイソンはいわば「社会の目」から人間を見ていたのだが，そこにおいてもクライドの事件を商品化し，個の名声のために動かされる作用が働いていたのである。クライドとメイソンは，ともに社会機構に働く作用に動かされていたのだが，クライドは内的な矛盾をかかえつつ葛藤し，結局は状況に流されて個人のもつ力の及ばないところで事態が進むのである。メイソンは，クライドのような内的な矛盾は持たずに，個の地位，名声を得る手段として裁判に立ち向かい，一つの成功を収め，現実的な成功者として個を確立させてゆくのである。

そして，母親のエルヴィラは，貧しいながらも伝道者として人間としての道徳観念を第一義として生き，ピューリタンの立場が強く醸し出されているのである。その精神性を保つことを失わず，社会的な逆境にも負けることなく，最後まで息子を愛し，信じて生きるのである。アメリカン・ドリームが自由と平等の理念に基づく民主主義の社会を実現し，人々の幸福を推し進める理想であるならば，母親の生き方こそ，人間の自由と平等を理念とするアメリカン・ドリームを体現しているものと考えられるのである。

これまでみてきたように，クライドには最後まで「本当に罪を犯したのか」と納得できずに，繰り返し生の衝動が起きてきている。「成功の夢」に向かいつつも内的な矛盾をかかえた失敗者としてのクライド，クライドを社会正義の立場から罪に追い込み成功を収めるメイソン，二人の背後でアメリカン・ドリームを精神的に体現する母親の三者の立場が考えられるのである。このように裁判をめぐる過程において，物質文明が進んだアメリカ社会における生の衝動が，三人の立場を通して描写されているのである。

５．アメリカン・ドリームと悲劇性

（１）クライドの悲劇

主人公クライド・グリフィスは，２０世紀アメリカ社会での失敗者，すなわち「成功の夢」の不適者として結末を迎える。それは，クライドが，元来，競争の適者としての環境的な条件や精神的な強さを持っていないにもかかわらず，競争原理が働く社会において「成功の夢」を抱き，その幻に翻弄し，その結果，悲劇的な人生を終えることになるのである。これを「悲劇的」と形容するのは，クライドの中に，ニーチェの悲劇概念としての「アポロ的」なものと「ディオニュソス的」なものの両者が存在し，欲望する本性によって矛盾を生み出してしまうにもかかわらず，なお生きようと欲するところに見いだせるのである。

クライドは，伝道生活を行う両親のもとでの貧しい家庭で育った。そして，目にするのは華やかな都会生活に興じる人々であった。彼にはピューリタンとしての因習的な道徳意識が生まれるが，その精神性に満足することはできなかった。成果の上がらぬ宗教に嫌気がさし，幸福と成功を考えるに及ぶのであった。何をすればいいのか，どっちを向いて進めばいいのか，それがクライドの抱く疑問であり，また希望でもあった。社会生活での実利的な教育を受けていないクライドは，自らそのことに気付き，自分が独力で何かをする以外にはないことを悟っていたのである。クライドの自己を形成し，幸福を手にするという「成功の夢」は，こうして導かれるのであった。クライドのなかに「アポロ的」なものをみるのは，この考えが英知的で，具体的に形あるものを築こうとする形象化の姿勢があるからである。すなわち，情念を形象あるものへとする作用が見出されることである。また，クライドの半生において，「ディオニュソス的」なものを見い出すこともできる。伯父のサミュエル・グリフィスが経営する工場で働き，徐々に責任と地位が与えられるようになる。だが，やはりとりわけ教育を受けていないクライドは，社交界の人々とは断絶を感ずるのである。クライドの上昇志向はこの壁を乗り越えることにある。やがて，女性への快楽を満たすようになり，さらには上流社会の仲間入りの欲望を持ち，そのチャンスが到来するのである。そして，二人の女性をめぐってジレンマに陥る。一方は貧しさの，もう一方は「成功の夢」の象徴なのである。クライドの心は，富，地

位，性の獲得に翻弄し「成功の夢」を逃がすまいと陶酔するのである。人間を商品化し，個々の競争がもたらす物質追求主義に心が奪われるのである。このような因習的な倫理と物質追求主義の狭間で葛藤する様相に，クライドの「ディオニュソス的」な苦しみが見いだされるのである。結果的には，彼自身の計画がもたらした偶然的なボート転覆事件によって，破壊的な運命を背負うことになるのである。

クライドには，もともと「成功の夢」を実現させる強靭な意志があったとは言い切れない。彼に刺激を与える環境があり，その場の情勢に流されて進むべき道を選択するといった，外発的な方向づけによって生きていくのだった。しかし，裁判での過程で考える限り，その罪はクライド個人のものと帰せられ，死の恐怖へと陥れられるのである。本来，社会の正義を代表するはずのものが，それを執行する者の成功の糧として存在していたのである。自由と平等を理念とするアメリカン・ドリームは，むしろ息子への愛情と信念を貫き通し，クライドの生命を守り続けようとする母親エルヴィラによって体現されているように思われる。しかし，メイソンに代表される「社会の目」はクライドの生命を断つことで，その使命を全うする。「本当に自分に罪はあるのだろうか？」と決して納得できぬまま，生の衝動を喚起させるクライドの生命を奪ってゆくのである。

（２）アメリカ都市社会の矛盾と『アメリカの悲劇』

民主主義の名のもとでの「アメリカン・ドリーム」は，環境的にも精神的にも競争の適者としての条件を持たない一人のアメリカ青年に「成功の夢」を抱かせた。しかし，ドライサーは，社会的な環境に対する人間の無力さ，弱さをクライドと彼をめぐる人物に託している。クライド自身は法的な罪を納得できず，それに伴って道徳的にも罪の意識を持ちきれずに人生を終える。クライドの母親は，息子の無実を信じ，社会的な諸々の条件からクライドをどうにも救うことができず,精神的な癒しを宗教に求める。一方，検事のメイソンは，彼自身の社会的な地位と名声を得るためにクライドを罪に陥れようと奔走し，その実をつかんでいく。このように，アメリカの一青年クライドは，社会的な条件によって抹殺されるのだが，メイソンの成功と表裏の関係にあり，競争の不適者に追いやられてしまったのである。

クライドの内的な矛盾は，決してクライド個人によって解決できるものではないのである。今やアメリカ社会は資本主義が高度に発達し，物質的な富が一部の資産家に集中し，個々の競争が実を結ばなくなってきた社会背景を備えている。アメリカ建国のピューリタンが生活していた頃から時が経過し，すでにその二世三世そして四世の時代が訪れてきているのである。フランクリンに象徴されるような勤勉をモットーとする１３の徳目の励行によって「成功の夢」が実現できるのは，もはや遠い過去のことなのであろう。因習的な道徳意識よりも物質的な欲望を満たす文明社会が，現代のアメリカ都市社会なのであり，ドライサーはそのような社会機構にうごめかされる人間像を『アメリカの悲劇』で描いたのである。

アメリカ建国以来の民主主義の精神，すなわち機会均等の平等社会としての理念に生気を与える「アメリカン・ドリーム」は，元来，結果として物質的な不平等をもたらすシステムであるにもかかわらず，個々に「成功の夢」を抱かせるアメリカ国民のエネルギー源となってきた。『アメリカの悲劇』には，ニーチェの古典的な悲劇概念として示される「欲望する本性によって起こる矛盾を抱えつつも，なお生きていこうとする」人間の姿が描き出される。そして，物質文明が生んだ主体的思考に欠ける人間存在の本質を探り，アメリカ都市社会のどこにでも起こり得る一つのアメリカ的な悲劇をみるのである。

【TEXT】
Theodore Dreiser, *An American Tragedy*, A Signet Classic from New American Library, Penguin Books: New York and Toronto, 1964

本論文ではこのテキストを使用し，本文中に括弧に入れて示したものはすべて同書からの引用である。

【NOTES】

(1) ニーチェは，アポロとディオニュソスの対象を次のように摘記する。

	《アポロ》	《ディオニュソス》
素　姓	純ギリシャの神	トラキアのデーモン（鬼神）
住　居	天界	大地ならびに下界
聖　獣	白鳥，いるか	雄牛，豹，ライオン，蛇
植　物	月桂樹	常春藤（きずた），葡萄
奉仕者	ミューズの女神たち	マイナデス（酒神信女）
礼　拝	静的尊信	興奮的狂騒的密議
犠　牲	供物をする	いわゆる聖餐様式で，神自身（雄牛）が犠牲にされる
音　楽	荘厳な格調ある音楽	騒々しい舞踏音楽
特　性	冷静な自己抑制	陶酔，狂気

さらに彼は，ギリシャ文化が頂点に向かう変遷を五段階に捉える。

第１段階	ホメロス以前の巨人時代, あるいは青銅と英雄の時代（ディオニュソス的）
第２段階	ホメロス時代（アポロ的）
第３段階	ディオニュソス浸入の時代(ディオニュソス的)
第４段階	ドーリス指揮芸術の時代（アポロ的）
第５段階	紀元前６世紀のアッティカ悲劇 《ギリシャ文化史の頂点とみている》
（第６段階）	（紀元前５世紀以降, ソクラテスやエウリピデスから下り坂に向かう）

(2) 村山淳彦は，オスカー・マンデルの『悲劇の定義』をもとに『アメリカの悲劇』を検討している。オスカーの基本的な定義は次のようである。「以下の状況を具体的に描いていれば，それは悲劇的作品である。われわれの真摯な善意をかきたてる主人公が，所与の世界である種の深刻で壮大な目的にかりたてられ, 行動に出て, まさにその目的や行動のために，所与の世界を超越できない人間として，必然的かつ不可避的に，精神的にも肉体的にも重大な苦しみに出会う」と。それに対して村山は，第三部後半におけるクライドの姿に接して，「人はその思考の混乱や未熟や不明瞭さにもかかわらず，その努力の真摯さ，のっぴきならぬ疑念の力に，憐れを覚えるだけでなく，善意をかきたてられないであろうか。彼が手さぐりで求めているのは，たとえ形而上学的な問題設定にとらわれているとしても，自らの行為の意味を反省するときの基準となる知的枠組みである。それを求めることは, いかに初歩的なこととはいえ，人間の営為として無条件に肯定できる〈深刻で壮大な目的〉であり，行為ではあるまいか」と考え，悲劇的作品の古典に通ずる型を備えているものと結論づけている。（村山淳彦『セオドア・ドライサー論』南雲堂，1987）

本研究では，ギリシャ文化の変遷から考察するニーチェの悲劇概念を核に据え，主人公の営為が古典的な悲劇概念をもつ社会小説であるかを検討するものである。

(3) ニーチェ，秋山英夫訳『悲劇の誕生』岩波書店，1966，p.49

(4) 前掲書，p.50